目次

○JA役職員の皆様へ～組織基盤強化のために～ 3

Ⅰ.なぜ教育文化活動が必要なのか 4

1.協同組合は共通の理念をもち、暮らしに根ざした存在 4
2.JAが教育文化活動に取り組む意義 5
3.アクティブ・メンバーシップの確立（元気な主人公となるために） 6
4.教育文化活動をつうじて「共感」をはぐくみ、「感動」へ 7

Ⅱ.教育文化活動を進めるために 8

1.多様化した組合員の願いに近づくために 8
2.教育文化活動に段階的に取り組むために 10
3.教育文化活動を効果的に組み立てるために 11
4.教育文化活動をつうじて「共感」をはぐくむために 11

Ⅲ.教育文化活動が及ぼす効果について 13

1.教育文化活動とJA事業の関係を考える 13
2.組合員とともに活動を振り返り、次回の活動につなぐ 14

Ⅳ.家の光事業を活用し、JAへの共感を 15

1.家の光協会が発行する各種の媒体 15
2.さまざまな教育文化活動への取り組み支援 16
3.教育文化活動の理解を促進する大会・研修会・セミナー 17
4.教育文化活動の担当部課長への支援 17
5.JAへの共感を生む活動の提案 18
6.支店協同活動で組合員・地域住民が集う場を提供する 19
7.教育文化活動の集大成をめざす 19

むすび 「創造的自己改革時代」の教育文化活動 25

「JA教育文化活動検討委員会」設置要領 27

JA役職員の皆様へ
～組織基盤強化のために～

「農協改革」から農協法の改正、さらには5年後条項（准組合員の事業利用規制にかかる検討）という流れのなかで、総合JAのあり方が議論されています。「農協改革」の議論の大勢では、JAがもつ理念や社会的役割、組合員の暮らしに根ざした願いが軽視されています。

協同組合は、事業という経済的行為をとおして組合員が共有する理念（運動の目的）を実現するところに特性があります。理念を実現することが目的で、その手段として事業を行います。理念とは、組合員の暮らしに根ざした願い（暮らしの向上に対する思い）です。

ところが、JAの組合員も多様化しました。たとえば、組合員の農業やJAとのかかわり方には、濃淡（グラデーション）がみられます。多様化した組合員の声に耳を傾け、多様な願いに真摯に応えながら、理念の実現に向けて多様な取り組みが求められています。

現在求められている教育文化活動は「協同組合らしいJAづくりに向けて、JAの組合員や役職員がたいせつにしている理念を共有し、組合員が主体となって、地域を舞台にした活動を展開すること、またこうした活動をJAがサポートしていくこと」です。協同組合の理念は、事業だけでは実現できません。教育文化活動をつうじて多様化した組合員と向き合い、組織基盤が強化され、組合員の組織力と事業が結びついたとき、理念は実現されるのではないでしょうか。

「農協改革」では、准組合員の事業利用規制のあり方が議論の俎上に上りました。しかし、協同組合であるJAにとっては、准組合員の議論は単に制度上の問題にとどまりません。すべての組合員の願いに応える取り組みが求められています。その取り組みこそが教育文化活動であり、教育文化活動をつうじて組合員の「共感」をはぐくみ「感動」へとつなげることが重要です。

「農協改革」の動きに対しては、組合員から「JAは総合事業を行うことが絶対に必要だ」「准組合員は、農業や地域経済の発展を農業者とともに支えるパートナーだ」との声があがることがいちばんの力となります。

この「JA教育文化活動実践の手引き」では、協同組合、教育文化活動の意義を再確認するとともに、組合員が元気な主人公（アクティブ・メンバー）となるための認知⇒利用⇒参加⇒参画への段階的な取り組みと、その仕組みづくりを提起しています。すべてのJAに共通する答えはありません。組合員を主人公として、それぞれのJAで教育文化活動を組み立て、協同組合らしいJAづくりの核となる教育文化活動が活発になることを期待します。

結びに、この手引きは福井県立大学・北川太一教授、広島大学大学院・小林元助教、教育文化活動先進取り組みJAの6名の常勤役員と本会常勤役員を委員として、本会が平成28年度に設置した「JA教育文化活動検討委員会」による検討結果をもとにまとめたものであり、検討委員の皆様には心からお礼を申しあげます。

I

なぜ教育文化活動が必要なのか

1.協同組合は共通の理念をもち、暮らしに根ざした存在

共通の理念をもつ協同組合

協同組合には必ず、組合員にとっての「共通の理念」（運動の目的・皆がよりどころとする結集軸）があります。協同組合は事業という経済行為をとおしてこの共通の理念を実現するところに特性があります。事業はその手段であって、理念の実現が目的です。

そして協同組合が、人と人との結びつきやつながりに基づく組織として成立するためには、共通の理念が必要であり、そのことが協同組合の「組織力」につながります。協同組合の組織力とは、組合員の願いを意識的に結集させることによって発揮される力で、組織力の存在こそが株式会社などにはない協同組合に固有の強みです。

協同組合とは暮らしに根ざした存在である

いいかえれば、協同組合とは、組合員の暮らしに根ざした願い（下図参照）を、事業や活動によって実現していく仕組み、といえるでしょう。この仕組みをとおして、協同組合がたいせつにしている理念を実現することになります。そして理念の中心が、JAでは「農」「食」「地域」にあるわけです。

組合員の6つの願い＝組合員の暮らしに根ざした願い

①一定の収入を確保して、ゆとりのある生活がしたい（経済面の願い）

②健康に恵まれ、老後も元気に安心して暮らしたい（身体面の願い）

③心の豊かさを求め、潤いのある生涯を送りたい（精神面の願い）

④住みよい地域環境を守り、快適に暮らしたい（環境面の願い）

⑤地域や他者の役に立ち、充実感のある人生を送りたい（社会貢献の願い）

⑥自らが主体的に活動に参画し、生きがいを追求したい（自己実現の願い）

2.JAが教育文化活動に取り組む意義

協同組合らしいJAづくりのために

現在求められている教育文化活動とは「協同組合らしいJAづくりに向けて、JAの組合員や役職員がみずからたいせつにしている理念を共有し、組合員が主体となって、地域を舞台にした活動を展開すること。またこうした活動をJAがサポートしていくこと」です。このことをつうじてJAの組織・事業の裾野を広げ、さらには地域社会におけるJAの存在価値を高めることをめざすものです。

三位一体性を実現する教育文化活動

さらに教育文化活動は、その取り組みをつうじて、組合員が「出資者」であり、「利用者」であり「運営者」でもあること、すなわち協同組合の三位一体性を実現するための、なくてはならない活動でもあります。

認知から利用、そして参加・参画へ

そして教育文化活動は、JAを知り・学び=**認知**、事業をつうじて願いを実現し=**利用**、仲間づくりを行いながらJAの理念に基づいた活動へ加わり=**参加**、さらに自らの組織としてのJAの運営に積極的に携わる=**参画**、へと段階的に進みます。これらをつなぐために重要な役割を果たすのが「共感」や「感動」というキーワードであり、共感や感動を実現する舞台が「地域」であるといえるでしょう。そして、教育文化活動の主人公がJAの理念に結集する組合員であり、それをサポートするのが役職員です。

JAの取り組みに「横糸」を通す教育文化活動

JAは「総合農協」として、組合員の暮らしに根ざした願いを実現するために、多くの事業（営農、生活、信用、共済など）を行っています。しかし、JAの事業の縦割り化が進んできたことも否めません。さらには、事業と組合員の運動の関係性も疎遠になりつつあります。

こうしたなかで、教育文化活動には3つの「横糸」の機能があります。1つめは、組合員と組合員、組合員と地域住民をつなぐこと、2つめは、組合員や地域住民とJAの役職員をつなぐこと、3つめはJAの事業と事業、事業と活動をつなぐことです。この3つの「横糸」を通す取り組みが、教育文化活動であり、総合農協としての協同組合らしいJAづくりのためにも、教育文化活動は必須の活動といえるでしょう。

3.アクティブ・メンバーシップの確立（元気な主人公となるために）

アクティブ・メンバーシップとは

第27回JA全国大会の決議では「アクティブ・メンバーシップの確立」が掲げられました。

【アクティブ・メンバーシップとは?】

組合員が積極的に組合の事業や活動に参加すること。

JAにおいては、組合員が地域農業と協同組合の理念を理解し、「わがJA」意識を持ち、積極的な事業利用と協同活動に参加すること。

事業利用や協同活動への参加は、個々の組合員のニーズや考え方により、多様な関わり方を前提としている。

（第27回JA全国大会決議資料より）

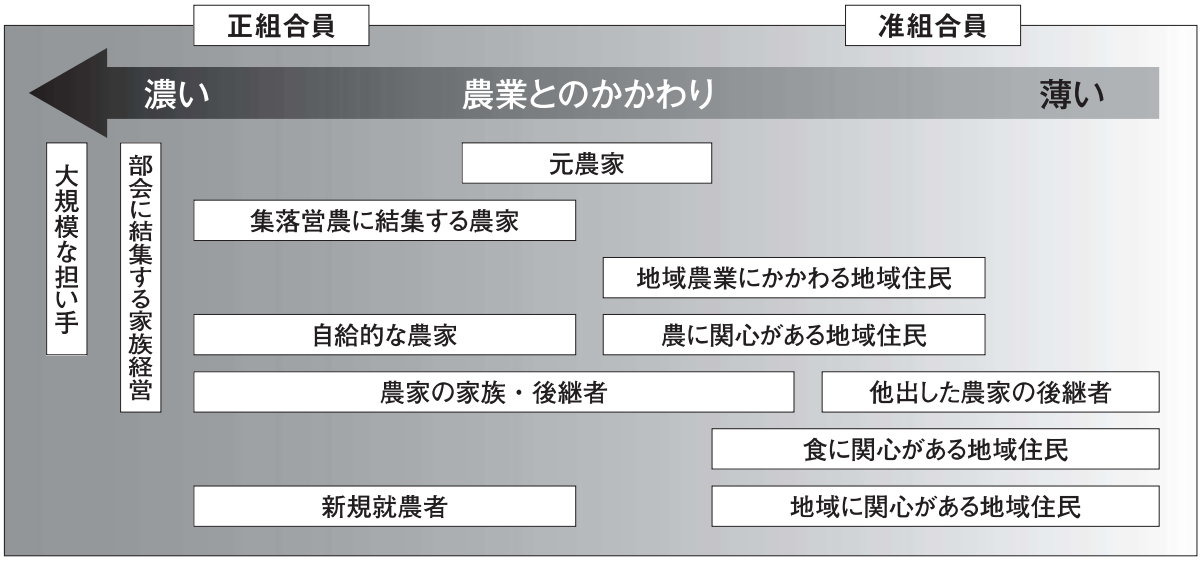
なぜ、いまアクティブ・メンバーシップなのか

なぜ、いまアクティブ・メンバーシップが提起されたのでしょうか。そこには2つの理由が考えられます。

1つめは、平成26年から進められた「農協改革」の議論です。そのなかでは協同組合の理念や社会的役割、組合員の暮らしに根ざした願いが、軽視されたのではないでしょうか。協同組合は、人間らしく幸せに生きていくためのたいせつな理念を有しています。今日、JAに結集する組合員が、元気な主人公（アクティブ・メンバー）となる協同組合を築くことが求められています。

2つめは、JAの内側、とくに組合員の多様化です。JAの組合員は、制度上、正組合員と准組合員に分けられています。しかし、高齢化するなどして農作業から少し遠くなった正組合員もいます。逆に地域農業に積極的にかかわる准組合員もいます。正組合員と准組合員の垣根が低くなって、正・准組合員それぞれの農業やJAとの関わり方に濃淡（グラデーション）が生じているのです。

農業とのかかわりが多様化する組合員の姿（イメージ）



4.教育文化活動をつうじて「共感」をはぐくみ、「感動」へ

多様化する組合員の願いの結集に向けて

今日の組合員は、農業やJAとのかかわりに濃淡が生じています。組合員の暮らしに根ざした願いも、多様化しています。JAの事業を総合的に利用し、さまざまな活動に参加・参画する中心的な組合員が活躍する一方で、JAのことをあまり知らない組合員も増えています。

これからの教育文化活動は、多様化した組合員の多様化した願いに応えながら組合員がJAに結集し、「元気な主人公」となる取り組み（アクティブ・メンバーシップの確立）を進めていくことが求められています。

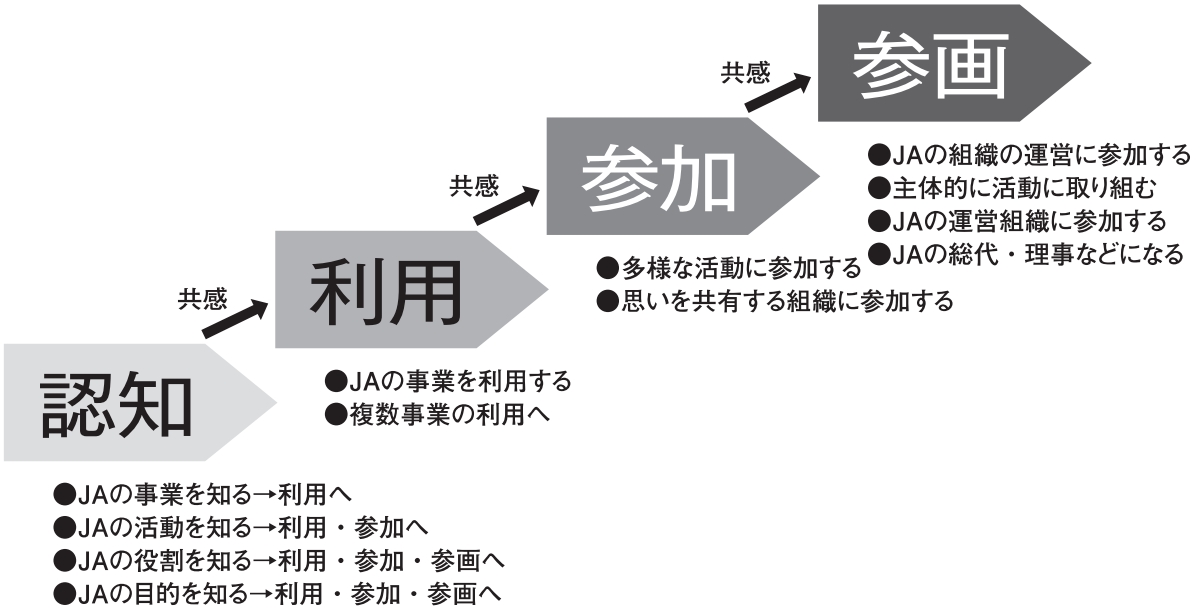
認知⇒利用⇒参加⇒参画へと段階的に取り組む教育文化活動

それには、組合員のJAとのかかわり方に応じた段階的な取り組みが必要です。まず、JAのさまざまな事業や活動、役割や目的を伝える＝ **認知** の取り組みからスタートしましょう。次に事業の **利用** につなげます。認知と利用をつうじて仲間づくりを進め、JAの理念に基づいた活動への **参加** につなげます。さらにみずからの組織としてのJAの運営に積極的に **参画** する取り組みをめざしましょう。

教育文化活動をつうじて「共感」をはぐくみ、「感動」へ

JAを取り巻く環境は、それぞれのJAによって大きく異なります。農業地帯のJAでは、農業者とりわけ次世代の地域農業の主人公を育てることが求められています。都市地域のJAでは、農業者である正組合員はもちろん、准組合員や地域住民の積極的な参加・参画が求められています。中山間地域では、地域住民みんながJAをよりどころに、農業と地域の振興の主人公となることかもしれません。

教育文化活動を段階的に組み立てるうえで、全国共通の方法は、ありません。それぞれのJAの組合員の多様な願いをもとに、みずから組み立てることが重要です。そのさい、たいせつにしたいキーワードは「共感」です。教育文化活動をつうじて、組合員の「共感」をはぐくみ、「感動」につなげましょう。



Ⅱ

教育文化活動を進めるために

1.多様化した組合員の願いに近づくために

中心的な農家組合員も多様化している

規模の大きな農業経営をしている組合員は、営農経済事業を中心にJAの事業を総合的に利用するとともに、生産部会に加入し、総代や理事を務めるなどJAの中心的な存在（コア組合員）です。同時に、JAから遠ざかりつつある大規模な農家組合員もいますし、JAとの接点が少ない次世代の地域農業の担い手もいるかもしれません。

地域農業を支える「多様な担い手」も、また多様化している

大規模な農家組合員がいる一方で、兼業農家や、集落営農に結集する農家組合員、自給的生産とあわせ、野菜を直売所に出荷する組合員もいます。地域農業を支える「多様な担い手」は、非農家の組合員も含めて裾野が広がり、組合員の農業やJAとのかかわり方も多様化しています。JAの中心的な組合員もいれば、少しずつJAから遠ざかっている組合員もいます。こうした「多様な担い手」の暮らしに根ざした願いをたいせつにしましょう。

地域に暮らす多様な組合員

准組合員には、援農ボランティアや市民農園などをつうじて積極的に農業とかかわる准組合員もいますし、多くが「食」に高い関心を示しています。食を「入り口」としてJAを知り、信用・共済などの事業を利用している准組合員もいます。また、暮らしに根ざした願い、たとえば高齢者福祉や生きがいづくりなどにも関心があるかもしれません。他方で、JAのことをあまり知らない正組合員もいることでしょう。

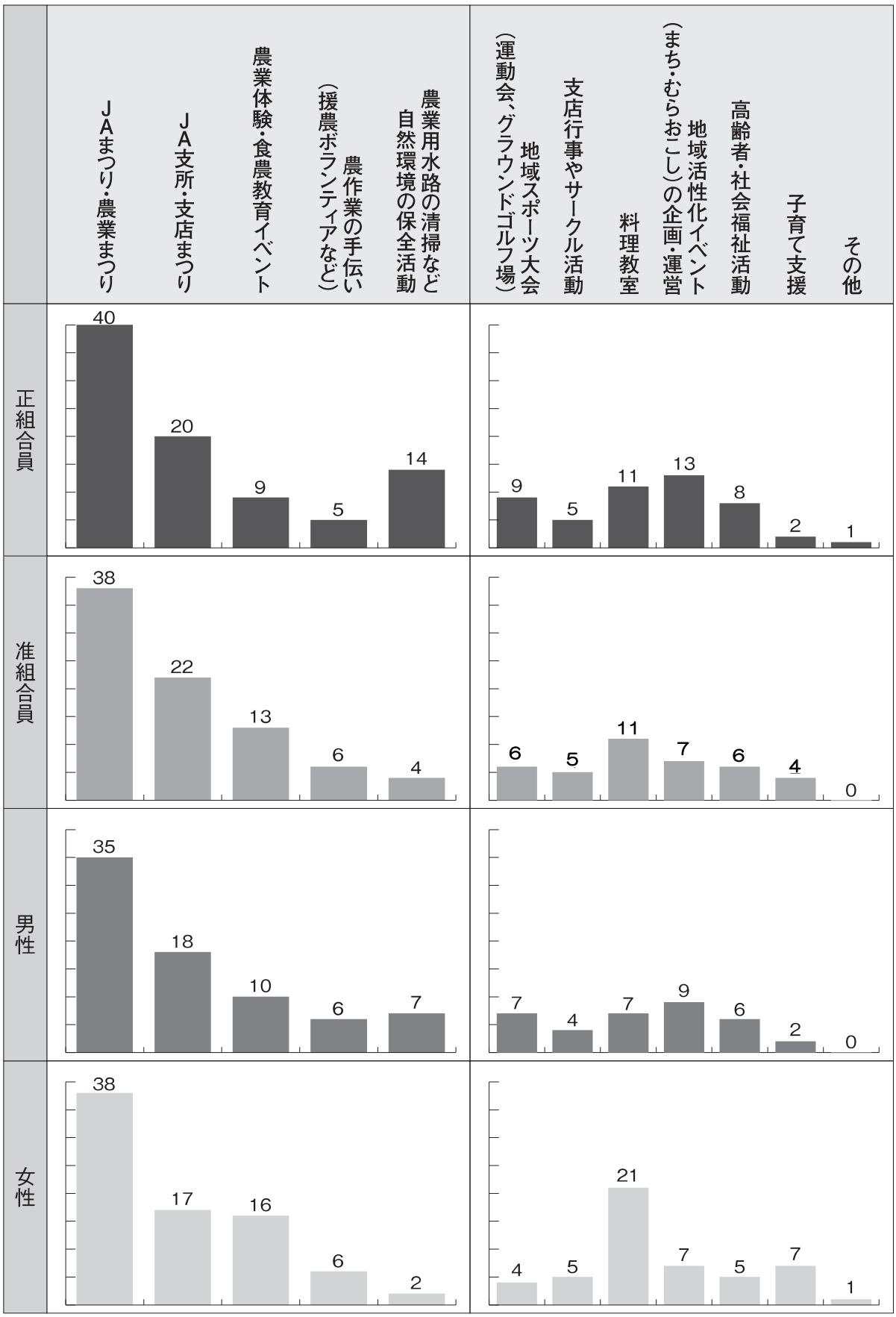
多様化した組合員の声を聴くことから始める

多様化した組合員を、組合員としてひとくくりに捉えるのではなく、組合員一人ひとりの願いに耳を傾けましょう。そのためには、訪問活動やアンケート調査、座談会や懇談会など、組合員の声を聴く取り組みが必要となります。

大規模JAなどでは、訪問活動が難しくなっているかもしれません。できるかぎり組合員と接する機会に、組合員の声を聴くことがたいせつです。支店や農産物直売所、支店協同活動やJAまつりなど組合員と接する機会を有効に活用しましょう。

また、一方的に役職員が語る・聴くのではなく、組合員とJA役職員の間に双方向の関係性（コミュニケーション）を築く工夫をしましょう。

組合員が参加したい協同活動（単位＝%）



資料:JA全中「JAの利用等に関するアンケート調査」より（平成27年3月、インターネット全国2,000名（正400、次世代400、准800、員外利用者400））

2.教育文化活動に段階的に取り組むために

- ●多様化した組合員の声を聴く（組合員の願い）
- ●JAの教育文化活動の点検（活動の目的の再確認）
- ●取り組みを段階的に組み立てる:認知⇒利用⇒参加⇒参画
- ●認知と利用、利用と参加、参加と参画を結びつける

教育文化活動の点検（活動の目的の再確認）

JAでは、さまざまな教育文化活動に取り組んでいます。しかし、その目的が明確になっていない取り組みも、少なからずあるのではないでしょうか。そこで、JAで取り組んでいる教育文化活動の点検をしてみましょう。取り組みの目的を「認知」「利用」「参加」「参画」のそれぞれの段階にあてはめて整理することです。

教育文化活動の活動領域は、以下の4つに分類されます。

①**教育・学習活動**：協同組合についての理解を深め、JA運動を発展させるための基礎的な活動（組合員、役職員、次世代、女性組織などの協同組合学習など）

②**情報・広報活動**：JAの事業・活動、農業情勢および組合員・地域住民の求める情報を提供し、JA・農業への理解を深める活動

③**生活文化活動**：生活者としての組合員・地域住民の願いや期待を実現し、JAファンを増やす活動

④**組合員組織の育成活動**：JAの最大の強みである組合員組織の育成と自主・自律的な組織づくりのための活動

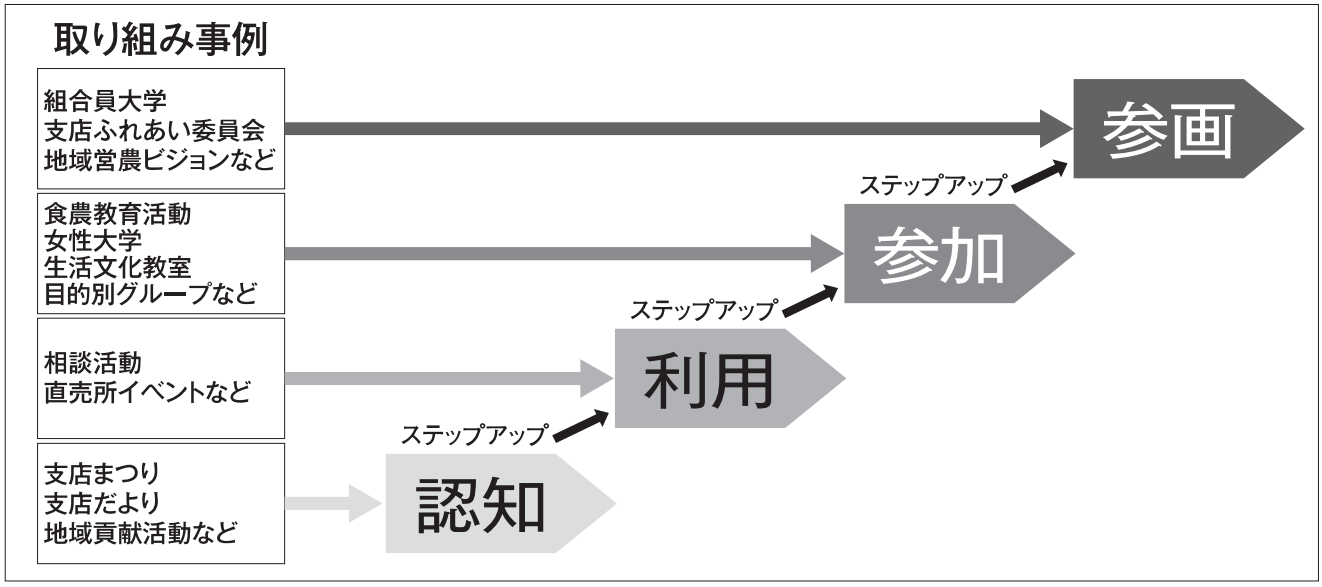
この活動領域を縦軸に、「認知」「利用」「参加」「参画」の4つの段階を横軸に、JAで実施している教育文化活動の取り組みを、それぞれの目的を考えながら整理してみましょう。こうした取り組みの整理をすることで、教育文化活動の目的や位置づけが明確となります。

次の表は、教育文化活動の点検の一例です。それぞれの取り組みは「認知」「利用」「参加」「参画」のいずれかにかかわり、さらに複数の段階にかかわっていることがわかります。

（例）教育文化活動の領域と、認知、利用、参加、参画の関係

	認知	利用	参加	参画	対象
教育・学習活動 例：組合員大学	◎	○	◎	◎	未来のコア組合員
情報・広報活動 例：支店だより	◎	○	○	△	地域の組合員・地域住民
生活文化活動 例：ちゃぐりんフェスタ	◎	○	◎	○	次世代組合員・子ども
組合員組織の育成活動 例：フレッシュミズ組織	○	○	◎	◎	女性組合員・地域住民

3.教育文化活動を効果的に組み立てるために



上の図では「認知」「利用」「参加」「参画」の段階ごとに、教育文化活動の取り組み事例を仮にあてはめてみました。ここでだいじなことは、それぞれの取り組みを、組合員が次の段階へとステップアップするようにつないでいくことです。

たとえば支店まつりをつうじて参加者にJAを知ってもらい（認知）、参加者の声を聴き、その人の願いに即した利用をすすめる（利用）、へとつないでいきます。さらに利用をつうじてその人の願いに応じたJAのさまざまな活動（参加）を促します。

そしてその先には、元気な主人公として活動することやJA運営の中心=参画となるような仕組み、すなわち教育文化活動を段階的に組み立てて、次のステップにつながる工夫をすることが重要です。

例①　JAのことをあまり知らない組合員

支店だよりを活用して、支店まつりへの参加でJAを知ってもらい（認知）⇒JAの相談活動や直売所の利用を促し（利用）⇒さまざまな活動を伝えることで活動への参加をよびかけ（参加）⇒JAの運営に関心をもってもらうために組合員大学への参加をすすめて参画につなげる（参画）。

例②　地域の中心的な農家組合員

地域営農ビジョンの策定をつうじて、地域の仲間たちの農業生産、願いや期待を知ってもらい（認知）、新たな品目導入や加工などの利用が広がり（利用）、地域の食と農を学ぶ食農教育への参加と活動の運営にかかわり（参加）、JAの運営につなげる（参画）。

4.教育文化活動をつうじて「共感」をはぐくむために

組合員の願いに応える職員を育てる

教育文化活動の主人公は組合員ですが、組合員を活動に誘う、組合員の活動をサポートする、事業と活動をつなぐなど、教育文化活動における職員の役割はひじょうに大きいものがあります。協同組合理念の実現に向けてJAづくりをすすめるには、まず職員が農協運動者でなければなりません。そして、一方的に「教える」のではなく、おたがいに「ひきだしあう」のが協同組合における「教育」の基本です。

そのためには、トップの姿勢がもっともたいせつです。職員や組合員に対して折にふれてビジョンを語ることや、キーとなる事務局に対しては思い切った権限を付与するなど後押しすることも有効でしょう。

活動を統括する担当部署の学習もだいじです。企画部門も関与して、JA全体として取り組む活動であると位置づけ、日常業務に追われる各部門の理解を得て、現場を動かしていくためにも、職員が教育文化活動の意義をしっかりと理解し、組合員の願いに応えることができる職員を育てることが重要です。担当者に限らず、すべての職員が教育文化活動の意義と目的を理解するためにも、職員同士の学習の場づくりや教育文化セミナーを開催しましょう。

横糸を通す組織体制をつくろう

認知⇒利用⇒参加⇒参画へと教育文化活動を段階的に組み立てるには、JAの各部署横断の横糸を通す組織体制が必要になります。「認知」から「利用」へつなぐためには、支店や営農経済センターなど組合員との接点が多い部署と事業部門との連携が必要です。

「参加」から「参画」へつなぐためには、活動の現場と支店ふれあい委員会などの運営組織との連携が必要です。

教育文化活動をJAの中長期の事業計画に位置づける

「認知」の段階では、情報発信や訪問活動、アンケートなどに取り組むための体制が必要となります。また、「認知」から「利用」へつなぐことと異なり、「利用」から「参加」、「参加」から「参画」へとつなぐには、新たな活動や組織を用意する必要があり、それには予算化や職員の配置などをともなうことにもなります。そのためにも、教育文化活動の目標を、JAの中長期的な事業計画にしっかりと位置づけましょう。

元気な主人公がワイワイと活動するJAづくりへ

教育文化活動は、協同組合らしいJAづくりに向けて、組合員や役職員が自らたいせつにしている理念を共有し、組合員が主体となって地域を舞台にした活動を展開すること、またこうした活動をJAがサポートしていくことです。

教育文化活動は、役職員から組合員へ、組合員のリーダーから参加者へといった一方通行の取り組みではありません。組合員と組合員、組合員と役職員がたがいに話し合い、ともに活動する双方向の関係性（コミュニケーション）をはぐくみましょう。

組合員の声をつなげてみよう

JAの主役は組合員であり、組合員が動く仕組みをつくるうえでも、意思疎通のために徹底した話し合いをすることが必要です。組合員の参加意識を、話し合いをつうじて高めていき、組合員が元気な主人公として参加意識をもつには、従来型の話し合いを、参加型すなわち一方通行ではなく双方向に変えていくことでたくさんのアイデアが出てくるようにする工夫が必要です。

ワークショップ（参加・体験型の双方向の学習）の活用や、ファシリテーター（会議やミーティングの場で話の流れを整理したり発言を促したりして協同を促進する役）の進行による会議や研修も注目されています。

Ⅲ

教育文化活動が及ぼす効果について

1.教育文化活動とJA事業の関係を考える

教育文化活動と事業成果には相関関係がある

地域活動（ここでは教育文化活動とほぼ同じ活動です）が活発なJA支店では、事業の成果に相関関係があることが統計的に明らかになっています。（仙田徹志「JA支店における地域活動と経営成果への影響に関する調査研究―愛知県内のJAを事例として―」報告会資料より）

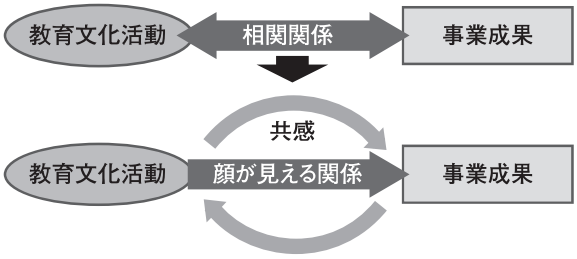
ただし、因果関係ではなく相関関係であり、地域活動をすればただちに事業成果に効果が現れるということではありません。

教育文化活動と事業成果の間には「顔が見える関係」が必要

JAの支店協同活動を調査した研究成果によると、支店協同活動をつうじて「知り合いの職員が増えた」「JAに親近感が増した」などと回答した組合員の事業利用と活動への参加が増加している傾向が明らかになりました。（JC総研・長野県農協地域開発機構「『一支店一協同活動』を機軸とするJAづくり」に関する調査研究、平成26年度事業調査報告書）

支店協同活動などの教育文化活動をつうじて組合員とJAの間に「顔が見える関係」をはぐくむことが、事業の利用につながるとともに、その次の活動への参加につながるということです。重要なことは、活動をつうじて「顔が見える関係」＝豊かな関係性を築くこと、そして次につなげる仕掛けや仕組みを工夫することです。

■JA支店の地域活動と事業成果の関連性の分析結果



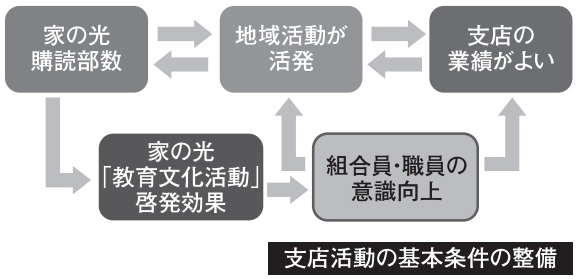
教育文化活動をつうじて「顔が見える関係」を築くと、事業につながる
「顔が見える関係」を深めることで、事業から活動につながる

■JA支店の地域活動と事業成果の関連性の分析結果

組合員向け活動	活動組織数	支店行動計画	支店まつり	支店だより	相談活動
貯金残高	○				○
貸付金残高	○		○	△	△
貯金件数	○		○	△	△
貸付件数	○		○	△	△
長期共済保有高	△			△	
長期共済新契約高	△			△	
短期共済新契約高					
自動車共済契約高	○	○	○	○	
家の光購読部数	○	○		○	

○は正の相関関係、△は相関関係はあるが立地や業態の影響もある
出所：（一社）農業開発研修センター「JA支店における地域活動と経営成果への影響に関する調査研究報告書」（2013年3月）より抜粋

■JA支店における地域活動と経営成果に関する模式図



資料：仙田徹志「JA支店における地域活動と経営成果への影響に関する調査研究―愛知県内のJAを事例として―」報告会資料より

共感をはぐくむ仕掛けや仕組みを工夫する

「顔が見える関係」をはぐくむためには、活動に参加した組合員に声をかける、活動の感想をたずねるなど、さまざまな関係づくりが効果的です。また、次の活動につなげるために、JAのさまざまな教育文化活動や相談活動を紹介する、思いやニーズに耳を傾けるなど、仕掛けや仕組みを生み出していきましょう。

教育文化活動をつうじて「共感」と「感動」をはぐくみ、JAの目的や理念に「共感」し、積極的に事業や活動に参加・参画する元気な主人公（アクティブ・メンバー）を増やしましょう。

2.組合員とともに活動を振り返り、次回の活動につなぐ

教育文化活動を振り返り、次回の活動につなげる

JAではさまざまな教育文化活動が行われていますが、やりっぱなしの取り組みもあるかもしれません。教育文化活動は、JAの組合員や役職員がみずからたいせつにしている理念を共有する取り組みです。

取り組みが理念に近づいたのか、振り返りをすること、そこで気づいたことを次回の活動につなげることが重要になります。そこから共感もはぐくまれ、深まります。

教育文化活動を積極的に発信して、共感をはぐくむ

さまざまな教育文化活動を積極的に発信しましょう。JAの広報誌や支店だよりなどで発信すると、参加者や運営に参加した組合員にとって喜びや自信につながり、よりいっそう共感が生まれます。支店や農産物直売所などで活動の成果を展示することで、組合員や地域住民がJAを訪れるきっかけにもなります。

また、活動に参加できなかった組合員、取り組み自体を知らない組合員もおおぜいいます。直近のアンケート調査では、たくさんの組合員が農業体験などの活動への参加を期待しているにもかかわらず、JAの農業体験活動を知らないということも明らかになりました。（JC総研に設置した「JAの体系的な組合員政策に関する研究会」が平成28年度に実施したJA組合員アンケート）

教育文化活動を積極的に発信することは、アクティブ・メンバーシップの入り口としての「認知」や「参加」につながります。

教育文化活動の成果をみんなで共有する

教育文化活動の成果を数値化するなど、定量的に把握することは難しく、客観的に評価することはあまり行われていません。このため、役職員にとっては業績評価などにつながりにくい、組合員にとっては活動の成果が見えにくい、などの課題があることも事実でしょう。

そこで「評価のための評価」ではなく、教育文化活動の成果をみんなで共有できる仕組みを考えていきましょう。その一つが、教育文化活動の活動報告会や、取り組みの表彰制度です。活動報告会を実施することで、JAで取り組まれているさまざまな教育文化活動が共有されます。報告会で共有した事例にヒントを得て、新たな取り組みが生まれることも期待できます。

そのうえで、取り組みの表彰制度などの導入も検討してみましょう。表彰された取り組みにかかわった組合員や役職員にとっては自信につながりますし、次の取り組みへのモチベーションになることも期待されます。

Ⅳ

家の光事業を活用し、JAへの共感を

1.家の光協会が発行する各種の媒体

教育文化活動を活発に展開するために『家の光』をはじめとする情報媒体や家の光協会が提案する各種文化活動・研修会等を積極的に活用しましょう。

『家の光』

組合員、JA女性組織メンバー、役職員などを対象に情報を提供し、「食と農」「暮らし」「協同」「家族」を柱に、「人・組織・地域の幸せづくりをめざす農協運動の底力となる雑誌」となるように制作しています。創刊の目的である、協同のたいせつさを伝えることを最重点企画と位置づけ、わかりやすさと共感をキーワードに編集しています。また、料理や手芸、園芸、健康などの記事を個人で楽しんだり役立てたりするだけではなく、JA女性組織をはじめとする読者の皆様が、地域活性化、社会貢献にまで結びつけ、多彩に活用していただけるようさらに内容を充実させていきます。

『地上』

JA青年組織盟友をはじめ、農業・地域・JAを担うリーダーを対象に情報を提供し、農業・農政・青年組織の理解を促進します。とくに農政特集やJA青年組織活性化の連載記事を掲載し、地域や組織の仲間とともに、農業を伝え、次の世代につないでいこうとする、青年農業者の頼れるパートナーとして、彼らの思いや悩みを共有し、課題を解決するための企画を発信しつづけます。

『ちゃぐりん』

JAグループの食農教育をすすめる雑誌として、とくに小学生の子どもたちを対象に情報を提供し、いのち・農業・食べ物・JAへの理解を促進する記事を掲載しています。

『やさい畑』

日本で初めての家庭菜園雑誌として、地域住民や消費者を対象に家庭菜園の情報を提供し、農業・JAへの理解を促進しています。

「家の光図書」

生活実用書を中心に、農業書、教養書、協同組合書など、組合員・地域住民・JA役職員にとって役に立つ情報を提供しています。

「JA教育文化・家の光ニュース」

JAトップ層と教育文化・家の光プランナー、教育文化活動担当職員を対象に、教育文化活動への理解の促進に必要な情報を提供しています。

インターネットによる情報発信

「家の光ネット」やウェブマガジン「pikkari」、フェイスブック、「家の光メールマガジン」をつうじ、組合員・地域住民などに食と農やJA、記事活用・文化活動の情報を提供しています。

2.さまざまな教育文化活動への取り組み支援

JA家の光大会
支援内容：賞状（感謝状）、記念品の提供

JA女性大学
支援内容：企画内容の相談、事例集の提供

JA組合員大学
支援内容：企画内容の相談、事例集の提供

家の光記事活用グループ
支援内容：資材の提供・育成促進

JAハッピー マイライフセミナー
支援内容：ライフプラン・家計簿・エンディングノートの作成についての講師あっせん、資材の提供

JA家の光（親子）料理教室
支援内容：資材・情報の提供

JA家の光（親子）クッキング・フェスタ
支援内容：企画・実施のコーディネート、専門講師の派遣

JA家の光手芸教室
支援内容：協力会社と連携して教材（材料）をあっせん

JA家の光健康教室
支援内容：（公財）日本レクリエーション協会、都道府県レクリエーション協会の講師を紹介

JA家の光絵手紙教室
支援内容：日本絵手紙協会と協力して講師をあっせん

JAあぐりスクール
支援内容：企画内容の相談、先進事例の紹介

JA（親子）ちゃぐりんフェスタ
支援内容：記念品の提供、食農教育資材の貸し出し

JA読書サポーター研修会
支援内容：企画相談、活用資材の提供

読書ボランティア養成講座
実施内容：読み聞かせ活動のボランティア養成を目的に全国3会場で開催

読書ボランティアスキルアップ講座
実施内容：読み聞かせボランティアのレベルアップを目的に開催

ザ・地産地消　家の光料理コンテスト
実施内容：一般料理・スイーツの2部門について募集・顕彰

世界こども図画コンテスト
実施内容：小1～中3の児童・生徒を対象に、農業・農村・自然・環境・人・家族をテーマに募集・顕彰

農家の家計実態調査
実施内容：JA全国女性協とともに家計簿記帳農家の家計実態を調査し、生活文化活動や女性組織活動に反映するための貴重なデータの作成

JA食農教育リーダー研修会
実施内容：JA食農教育担当部署の部課長・担当者を対象に、食農教育の実践手法習得を目的に開催

あぐりスクール全国サミット
実施内容：常勤役員、JA食農教育担当部署の部課長・担当者を対象に、「あぐりスクール」の実践事例に学びながら相互研鑽を目的に開催

家活グランプリ
実施内容：JAの本・支店で職員が実践している『家の光』『地上』『ちゃぐりん』の記事活用アイデアを募集・顕彰

3.教育文化活動の理解を促進する大会・研修会・セミナー

全国家の光大会
対象者：組合員、女性部員、役職員
家の光文化賞トップフォーラム
対象者：常勤役員・理事などトップ層
地区別JA教育文化活動研究集会
対象者：家の光担当部課長、企画担当部課長、教育文化・家の光プランナー、支店長、女性組織事務局、生活文化活動担当者
「教育文化・家の光プランナー」専修講座
対象者：教育文化・家の光プランナー初任者
JA教育文化セミナー
対象者：役職員ほか

4.教育文化活動の担当部課長への支援

教育文化・家の光プランナー制度

JAにおいて教育文化活動の企画立案・実践に中心的な役割を果たす部課長（教育文化活動担当部署または家の光事業担当部署および総務企画担当部署）に登録していただき、研修や活動支援、情報の提供をしています。

組合員のアクティブ・メンバーシップの確立を促す記事活用・文化活動

JA	JA家の光大会／JA（親子）ちゃぐりんフェスタ 記事活用グループ JA組合員大学・JA女性大学 JA「ハッピー マイライフ」セミナー JA家の光（親子）料理教室 JA家の光生活文化（手芸・健康・絵手紙など）教室 あぐりスクール
都道府県・全国	都道府県家の光大会／ちゃぐりんフェスタ 「ハッピー マイライフ」リーダー研修会 JA家の光食農教育リーダー研修会 あぐりスクール全国サミット 全国家の光大会

5.JAへの共感を生む活動の提案

家の光記事活用グループで星の数ほど「小さな協同」をつくる

『家の光』を持ち寄って、料理や手芸、読書会などの記事活用に取り組む「家の光記事活用グループ」が全国で活動しています。「目的が明確で気軽に参加できる」グループ活動は、一人ひとりの心豊かな暮らしの実現はもとより、JA生活文化活動やJA女性組織活動としても評価されています。現在、全国で約5,500のグループ数があり、小さな協同の気づきや学びの場となっています。JA家の光大会や女性組織の集まりなどで、日ごろの活動の成果を発表する場を設けることも、活動をいきいきとしたものにします。

持ち寄り読書でJA・協同組合への理解を深める

JAでは、女性組織の役員会や研修会、職員の朝礼、会議や研修、組合員による座談会など、さまざまな集まりがあります。『家の光』を持ち寄って、5〜10分、ちょっとした時間に記事を読みあったり記事の内容について話し合う読書活動は、グループ活動等のウオーミングアップになり、気づきが組織を活性化します。持ち寄り読書は、短い時間で行うことができ、『家の光』創刊時から「家の光読書会」の名称で取り組まれてきました。

とくに『家の光』の記事（「JAなるほど質問箱」「みんなでできた！ JA女性組織」等）は組合員だけでなく役職員にとってもJAや女性組織の活動について知識や情報を共有できるため、役職員による朝礼や職員研修会、そして女性大学などでも活用しましょう。

JA家の光（親子）クッキング・フェスタで食と農と協同のたいせつさを伝える

JA家の光（親子）クッキング・フェスタは、著名な料理研究家に『家の光』「家の光図書」などを活用しながら地域の農畜産物を生かした料理を考えてもらい、参加者に試食していただく場です。料理は、講師として招いた料理研究家とJA女性組織メンバーが力を合わせて作ります。組合員や女性組織メンバー、地域の人々、次代を担う子どもたちや若い世代などに参加してもらい、おいしい料理をつうじてJAのことを身近に感じてもらい、安心・安全な地域の農畜産物をPRし、食と農のたいせつさを伝えます。また、仲間同士が力を合わせて大きなイベントに取り組み、成功させることで、結びつきがいっそう強まります。

JA家の光大会の開催で感動を共有する

JA家の光大会は、『家の光』愛読者を中心に、女性部員などが集い、日ごろの活動の発表・作品展示・記念講演などを行い、参加者が記事活用体験発表から学び、交流を深める場です。JAと組合員のきずなを深めるため全国で開催されています。共感を得、感動を生む場でもあります。

6.支店協同活動で組合員・地域住民がJAに集う場を提供する

調理室などでの活動支援

- JA家の光（親子）料理教室開催支援
- JA家の光（親子）クッキング・フェスタ開催支援

窓口・ロビーでの交流支援

- 支店窓口での記事活用作品（手芸、絵手紙など）や活動内容がわかる写真の展示（料理やイベントなど）、提案
- 展示用パネルの貸し出し
- 図書予約組合の活用として本の閲覧スペース設置の提案

会議室やホールでの活動支援

- JA生活文化教室（手芸・絵手紙・健康）の開催支援
- ハッピー マイライフセミナーの開催支援
- 家の光記事活用グループ結成支援
- JA女性大学・JA組合員大学開催支援
- JA読書サポーター研修会開催支援

食農教育活動の展開

- JA（親子）ちゃぐりんフェスタ、あぐりスクール開催支援
- 食農教育資材貸し出し
- 「食農教育紙芝居」資材提供と貸し出し

7.教育文化活動の集大成をめざす

家の光文化賞、文化賞促進賞への挑戦

教育文化活動を積極的に展開し、他の範となるJAを対象に募集し、顕彰している家の光文化賞・家の光文化賞促進賞に、JAにおける教育文化活動の取り組みの集大成として、挑戦しましょう。

教育文化活動の段階別目標ならびに内容・方法と家の光事業の活用

JAへの関心度 / 対応方向	◆無関心の段階 （地域住民）	◆当面の利益になることに関心がある段階 （准組合員・新規加入正組合員）	◆JAの事業・活動に積極的に参加する段階 （自覚的組合員・次世代リーダー）	◆JAの事業・活動に主役として参画する段階 （組合員リーダー）
活動目標	**◆認知・参加** ●JAを知る ●JAに足を運ぶ ●協同組合について関心をもつ	**◆参加・利用** ●JAの活動に参加する ●JAの事業を利用する ●地域農業・協同組合のたいせつさについて理解を深める	**◆組合員組織化** ●組合員組織への加入促進 ●仲間づくりをすすめる ●JAは組合員が主体的に運営することを理解する	**◆参画** ●自主的に参画するための知識・技能を身につける ●JA運営に参画する
活動内容	●「食」「農業」「JA」などについての情報提供 ●イベント開催	●JAの理念・組織についての学習会 ●ニーズに応じた目的別の活動を展開	●組合員組織（リーダー）研修 ●座学での集合研修 ●グループ活動（小さな協同活動）の促進	●自主的参画に向けての研修会・情報提供 ●支店（支所）運営委員会による計画作り・実行 ●JA事業計画策定への参画
有効な活動機会・方法	●各種広報媒体 ●JAまつり ●食農イベント ●スポーツ・健康行事 ●旅行事業 ●子育て支援 ●図画・作文募集	●新規組合員研修会 ●組合員訪問活動 ●集落座談会 ●相談活動 ●家計簿・ライフプラン・わたしノートの活用（「ハッピー マイライフ運動」の展開） ●生活文化教室（料理・手芸・健康・絵手紙 など） ●あぐりスクール ●農産物直売所 ●年金友の会イベント ●総合ポイント	●女性部（リーダー）学習会 ●青（壮）年部（リーダー）学習会 ●生産部会（リーダー）学習会 ●組合員大学 ●女性大学 ●文化講演会 ●目的別グループ活動	●理事研修会 ●総代研修会 ●支店（支所）運営委員会 ●女性部・青（壮）年部とJA役員の懇談会
	支店（支所）協同活動（参加）		支店（支所）協同活動（運営）	
家の光事業の活用	●『家の光』などの各媒体をつうじた「食」「農業」「JA」「暮らし」についての情報提供 ●JAまつり等での『家の光』記事活用作品展示 ●展示用パネルの活用 ●食農教育資材（着ぐるみ、紙芝居など）の活用	●「ハッピー マイライフ運動」の展開 ●支店（支所）を拠点に、『家の光』『ちゃぐりん』を活用した、記事活用グループ、食農教育活動の展開 ●「あぐりスクール」「ちゃぐりんフェスタ」の開催 ●『家の光』「家の光臨時増刊号」『地上』を活用したJAや協同組合についての学習 ●各種講演会、学習会の講師あっせん ●「JA家の光料理教室」「JA家の光クッキング・フェスタ」への参加 ●手芸教室、健康教室、絵手紙教室などの開催 ●総合ポイント制度のポイント交換賞品として「家の光図書」を活用	●JA組合員大学の開講 ●JA女性大学の開講 ●『地上』を活用した青（壮）年部（リーダー）学習会 ●『家の光』「JA女性組織学習冊子」を活用した女性部（リーダー）学習会 ●「組合員大学事例集」「女性大学事例集」の活用 ●各種学習会、講演会の講師あっせん ●「家の光記事活用グループ」の立ち上げ、活性化	●JAの組織・活動・事業をテーマとした「家の光図書」を活用した、理事・総代学習会 ●各媒体をつうじた、農業・農政・農協に関する情報を活用

組合員に「協同組合」を伝えるためには、　JA役職員の「協同組合学習」が不可欠である

多様な組合員の類型に対応した段階的な教育文化活動の提案（例）

「地域に暮らす多様な組合員」とは、高齢になって農業から遠ざかった正組合員や、農業とのかかわりが少ない正組合員家族、JAの事業を利用する准組合員なども含めて、地域に暮らす幅広い組合員を意味しています。
この表は、あくまで一例であり、それぞれのJAのおかれた状況にあわせて独自の類型分類と取り組み内容を考えてください。

中心的な農家組合員の取り組みの例

①JAの中心的な農家組合員

	認知（JAを知る）	利用（事業を利用する）	参加（活動や組織に加わる）	参画（JAの運営に携わる）
教育文化活動	農業塾	組合員大学	あぐりスクール	総代研修、理事研修
内容	異なる品目の 生産者と交流する	協同組合の 理念について学習	野菜栽培の 技術指導などの講師役	JAの事業運営について提言 研修テキストとして「家の光図書」の活用
つながる仕掛け	TACとの相談	『地上』を学習資材として流通や農政関連の情報を学習	『ちゃぐりん』の活用 営農指導員や生活担当者とのコミュニケーション	基礎組織や座談会、懇親会への参加から、総代や理事にJAの事業と運動を主導

②JAと疎遠になりつつある農家組合員

	認知（JAを知る）	利用（事業を利用する）	参加（活動や組織に加わる）	参画（JAの運営に携わる）
教育文化活動	JA広報誌の取材・掲載	直売所への出荷などJA事業の利用	あぐりスクール ちゃぐりんフェスタ	組合員大学 支店運営委員会
内容	JAの仲間として紹介	TACや直売所メンバーとのコミュニケーション	野菜栽培の 技術指導などの講師役	JAの事業と 運動について学習
つながる仕掛け	TACとの連携に よる声かけ	利用する意義を理解	『ちゃぐりん』の活用 営農指導員や生活担当者とのコミュニケーション	支店の運営に意思反映

③次世代の地域農業の主人公

	認知（JAを知る）	利用（事業を利用する）	参加（活動や組織に加わる）	参画（JAの運営に携わる）
教育文化活動	農業塾 青年部への加入	あぐりスクール ちゃぐりんフェスタ	支店協同活動 組合員大学	支店運営委員会 JA役員との意見交換
内容	青年部の仲間づくり 『地上』をテキストとした学習会	野菜栽培の技術指導などの講師役 『ちゃぐりん』の活用	JAの事業と運動について学習	JAの事業に提言
つながる仕掛け	仲間や青年部事務局との コミュニケーション	子どもたちとのふれあい 生産意欲を高める 営農指導員や生活担当者との関係性	支店職員とのコミュニケーション	支店の運営に意思反映

④農家組合員の家族

	認知（JAを知る）	利用（事業を利用する）	参加（活動や組織に加わる）	参画（JAの運営に携わる）
教育文化活動	手芸教室 料理教室 健康教室など生活文化活動全般	クッキング・フェスタ 女性大学	女性組織への加入 仲間づくり 家の光記事活用グループ	組合員大学 女性大学
内容	多様な生活文化活動で接点が増える 『家の光』の記事を活用する	食と農への意識を高める 女性大学での学習活動 仲間づくり	女性組織の活動に『家の光』の記事を活用する	「家の光図書」の活用
つながる仕掛け	訪問活動や直売所などで広報する	女性組織への加入促進	多様な生活文化活動を用意	参加しやすく幅広い学習機会を用意

地域農業を支える多様な農家組合員の取り組みの例

⑤兼業農家や集落営農に参加する農家組合

	認知（JAを知る）	利用（事業を利用する）	参加（活動や組織に加わる）	参画（JAの運営に携わる）
教育文化活動	農業塾 青年部への加入	あぐりスクール ちゃぐりんフェスタ	支店協同活動 組合員大学	支店運営委員会 JA役員との意見交換
内容	青年部の仲間づくり 『地上』をテキストとした学習会	野菜栽培の技術指導などの講師役 『ちゃぐりん』の活用	JAの事業と運動について学習	JAの事業に提言
つながる仕掛け	仲間や青年部事務局との コミュニケーション	子どもたちとの交流で生産意欲を高める 営農指導員や生活担当者との関係性	支店職員とのコミュニケーション	支店の運営に意思反映

⑥自給的生産を含む地域農業の多様な担い手

	認知（JAを知る）	利用（事業を利用する）	参加（活動や組織に加わる）	参画（JAの運営に携わる）
教育文化活動	直売所でのイベント	クッキング・フェスタ	料理教室	直売所運営委員会
内容	消費者のニーズを知る	直売所出荷をつうじて消費者との交流	伝統的な食文化や地産地消の食を知る	運営委員会をつうじて地産地消の推進役となる
つながる仕掛け	直売所出荷者の組織化	営農部署やふれあい担当との関係性	『家の光』記事を活用	直売所運営委員会の設立

⑦農業から少し遠くなったがJAに積極的にかかわる農家組合員

	認知（JAを知る）	利用（事業を利用する）	参加（活動や組織に加わる）	参画（JAの運営に携わる）
教育文化活動	組合員大学・女性大学	相談活動	支店協同活動	総代研修、理事研修
内容	JAや協同組合について学習する	ローン相談やくらしの相談に誘う	地域の仲間づくり 生活文化活動への参加	座談会や懇談会をつうじて総代や理事へ
つながる仕掛け	参加しやすい仕組みを用意 『家の光』『地上』「家の光図書」を活用	相談活動を積極的に広報する	支店協同活動	参加しやすい教育学習活動と、幅広い学習機会を用意

⑧少しずつ農業とJAから遠くなった農家組合員

	認知（JAを知る）	利用（事業を利用する）	参加（活動や組織に加わる）	参画（JAの運営に携わる）
教育文化活動	支店協同活動	相談活動	生活文化活動全般	組合員大学・女性大学
内容	支店協同活動への参加を呼びかけてJAの施設を訪れてもらう	ローン相談やくらしの相談に誘う	『家の光』記事を活用	あらためて農業やJAと近づいてもらう
つながる仕掛け	訪問活動や直売所などで広報	相談活動を積極的に広報する	記事活用グループへの誘い	参加しやすい教育学習活動と、幅広い学習機会を用意

地域に暮らす多様な組合員の取り組みの例

⑨積極的に農業とかかわる多様な組合員

	認知（JAを知る）	利用（事業を利用する）	参加（活動や組織に加わる）	参画（JAの運営に携わる）
教育文化活動	直売所でのイベント 料理教室	農業体験 あぐりスクール	男の料理教室 クッキング・フェスタ	組合員大学・女性大学
内容	直売所でのイベントでJAの取り組みを知る	経済事業の利用 信用事業の利用	生活文化活動への参加で農業から食へ関心を高めてもらう	参加・参画への意識と知識を高めてもらう
つながる仕掛け	食に関心の高い非農家組合員への積極的な広報	営農相談 『やさい畑』の活用	『家の光』『地上』を活用した学習	参加しやすい教育学習活動と、幅広い学習機会を用意

⑩食に関心が高い多様な組合員

	認知（JAを知る）	利用（事業を利用する）	参加（活動や組織に加わる）	参画（JAの運営に携わる）
教育文化活動	直売所でのイベント 料理教室	クッキング・フェスタ 直売所利用 料理教室	親子料理教室	組合員大学・女性大学
内容	直売所でのイベントでJAの取り組みを知る	直売所や生活店舗の利用で地域農業への共感を高める	料理教室への参加で食と農への関心を高める	組合員家族のニーズに応じて組合員大学や女性大学への参加
つながる仕掛け	食に関心の高い非農家組合員への積極的な広報	『家の光』料理記事の活用	『家の光』記事活用グループへの参加	参加しやすい教育学習活動の仕組みと幅広い学習の機会を用意する

⑪暮らしにかかわるニーズが高い多様な組合員

	認知（JAを知る）	利用（事業を利用する）	参加（活動や組織に加わる）	参画（JAの運営に携わる）
教育文化活動	支店協同活動	相談活動 ハッピー マイライフセミナー（ライフプラン&家計簿、エンディングノート） 健康教室	生活文化活動全般 『家の光』記事活用グループ	組合員大学・女性大学 フレッシュミズ組織などに加入
内容	手芸、園芸、食農教育など	ローン相談やくらしの相談	多様な生活文化活動で接点が増える	組合員のニーズに応じて組合員大学や女性大学に参加を呼びかける
つながる仕掛け	支店協同活動への参加を直接呼びかける 活動の写真を支店に貼るなどアピール	相談活動 金融、ふれあい担当との連携	無理のない身の丈にあったやわらかい組織を提案する	参加しやすい教育学習活動の仕組みと幅広い学習の機会を用意する

⑫JAのことをあまり知らない多様な組合員

	認知（JAを知る）	利用（事業を利用する）	参加（活動や組織に加わる）	参画（JAの運営に携わる）
教育文化活動	JA広報誌 JAまつり 直売所での食農イベント	クッキング・フェスタ 親子料理教室 ちゃぐりんフェスタ 親子あぐりスクール	生活文化活動全般 『家の光』記事活用グループ ハッピー マイライフセミナー	組合員大学・女性大学 フレッシュミズ組織などに加入
内容	JAの取り組みを知る	食と農への関心を深める 多様な生活文化活動や食農教育で接点が増える	組合員や家族のニーズに応じて生活文化活動をすすめる	組合員のニーズに応じて組合員大学や女性大学に参加を呼びかける
つながる仕掛け	支店協同活動への参加を促す	『家の光』記事の活用	フレッシュミズや女性組織への加入促進	参加しやすい教育学習活動の仕組みと幅広い学習の機会を用意する

むすび
「創造的自己改革時代」の教育文化活動

JA教育文化活動検討委員会
コーディネーター
福井県立大学教授 **北川 太一**

本報告書は、平成28年5月から4回にわたってJA教育文化活動検討委員会を開催し、討議を重ねてきた結果をまとめたものである。検討に際しては、過去に家の光協会によってまとめられた2つの報告書、①『人が元気・組織が元気・地域が元気になるために　JA教育文化活動の手引き（JA教育文化活動実践検討委員会報告』（平成20年7月）、ならびに②『「支店を核とした組織基盤強化検討委員会」報告書～支店協同活動を進めるために～』（平成25年5月）の内容を踏まえている。これら2つの報告書は、教育文化活動を進めるための具体的な実践方策ならびに支店協同活動を展開していくうえでの教育文化活動の役割を示したものであり、今でも有効で示唆に富む報告書である。ただし、これらの内容に加えて、最近のJAをとりまく状況をしっかりと認識したうえで改めてJAの教育文化活動のあり方を検討する必要性が生じていることも確かである。

「最近の状況」として、検討委員会において特に留意したのは次の2点である。

第一は、JAの組織基盤の変容・変質である。すなわち、最近のJA組織の状況は、一概に正組合員と准組合員という区別もできなくなり、農業や暮らし、地域とのかかわりにおいても意識や参加・参画の程度に著しい濃淡ができていることである。このことを本報告書では、「組合員の多様化」「グラデーション化」というキーワードを使って説明している。

第二は、外からのJAに対する「改革要請」のさらなる強まりである。周知のように規制改革推進会議等におけるきわめて乱暴な議論が席巻し、総合農協も含めた系統組織の否定・解体、協同組合の民間企業化への圧力が強くなっている。もし、規制改革推進会議が提示しているJA像や、今回の「改正農協法」がめざすところの「成長産業化」に貢献する農業専門事業体化がこれからのJAの進む方向ならば、教育文化活動は不要になる。

もちろん、農業を産業として取り扱い、その発展の道筋を描くことも重要な課題の一つではある。とは言うものの、私たち協同組合に関与する者は、一人ひとりが大切にされ尊重される社会、一人ひとりが役割を持ち、事業や活動に関与していく経済システムをめざしている。このことこそが新自由主義の弊害を克服し、よりよい暮らしと豊かな地域社会の実現につながると考えているからである。したがって、農業の問題を農業生産・経営者だけの枠組みにとどめるのではなく、実は兼業・小規模農家や地域住民の理解と関与のうえに農業や食料問題が成り立っていることを粘り強く訴えていくことこそが重要であり、この点において教育文化活動はJAが取り組むべき必須の活動として位置づけられるはずである。

以上、最近の状況として2つの点に留意するならば、これからの教育文化活動は次のような形で位置づけを明確にし、それぞれのステージにおける実践方策を関係者が共有し合い、お互いのスキルを高めていく必要がある。

1つは、なぜJA・協同組合が存在するのか、JA・協同組合としてのアイデンティティ（歴史的な役割を踏まえたうえでの組織の証・存在目的）を関係者が学び合い、腑に落とし、さらには外に向かって発信していくことである。この点について本報告書では、「共感」というキーワードを用いて教育文化活動の重要性を説明している。

2つは、組合員の多様化・グラデーション化が進んでいるとするならば、それに応じた教育文化活動のメニューを用意していくことが必要である。と同時に、組合員とJAとのかかわり方をより強くするために、ステップアップの考え方で教育文化活動を展開していくことも求められる。この点について本報告書では、2008 年の報告書で示された教育文化活動の4つの領域、①教育・学習活動、②情報・広報活動、③生活文化活動、④組合員組織の育成活動、を念頭に置きながら、新たに組合員のステップアップのプロセスとして「認知（入り口）」、「利用」、「参加」、「参画」という4つのステージに整理し、それぞれのステージにおいて教育文化活動がどのように位置づけられ役割を果たすのか、具体的な活動のメニューは何かを整理して示した。特に、各ステージに対応した具体的な教育文化活動の展開方法やメニューについては、事例編において領域・ステージごとに整理したうえで掲載しているので、各JAの条件をふまえて取り組みを検討してほしい。

周知のように、平成 27 年 10 月に開催された第 27 回JA全国大会の決議では、これからのJAグループがめざすべき姿が「食と農を基軸として地域に根ざした協同組合」と規定している。そして、「農業者の所得増大」と「農業生産の拡大」が「自己改革の最重点課題」として位置づけられ、さらには「地域の活性化」も重要課題とされ、「食と農を基軸として地域に根ざした協同組合」を実現するために、①「持続可能な農業の実現」、②「豊かでくらしやすい地域社会の実現」、③「協同組合としての役割発揮」という3つの「めざす姿」を掲げている。そこでは、消費者の信頼を得ること、総合事業をつうじて生活インフラ機能を果たすことが示されている。教育文化活動が食と農を結ぶことを促進し、農業者だけではなく准組合員や地域住民に対しても食と農の重要性、地域の課題解決も含めた生活文化活動や組織活動を具体的な協同活動として展開していくものとするならば、それはきわめて重要な役割を果たすはずである。

「創造的自己改革」とは、人に言われて行うものではなく、関係者が真摯に組織の現状と向き合い、課題を抽出し、それを解決していくために協同の力で実施するものである。①教育・学習活動、②情報・広報活動、③生活文化活動、④組合員組織の育成活動を主要内容とする教育文化活動が、こうした「創造的自己改革」の実現にとって有効な方法であることは言うまでもないことであろう。そのためには、常勤役員をはじめとする経営トップが懐の深い姿勢で決断し、リーダーシップを発揮すること、組合員と地域に向き合う実践者としての職員の役割がますます重要になることを指摘しておきたい。

最後に、一人でも多くのJA関係者が本報告書を手に取り、考える材料として活用し、先進・優良事例も参考にしつつ、自らの組織の実態に合わせて修正するところは修正し、多くのJAと情報交換・交流し合うことによって、本報告書がこの難局を打開する一助になるならば委員会のコーディネーターを務めた者として望外の喜びである。

「JA教育文化活動検討委員会」設置要領

一般社団法人 家の光協会

1.趣旨

第27回JA全国大会決議には、重点実施分野として「組合員の『アクティブ・メンバーシップ』の確立」が盛り込まれている。組合員構成の変化・多様化に多くのJAは十分な対応がはかられておらず、組合員の顧客化や「わがJA」意識の低下が課題とされるなか、組合員が地域農業の重要性と協同組合の理念を理解し、積極的に事業利用を行い、協同活動へ参加することが重要である。

また、准組合員についても「農業や地域経済の発展を共に支えるパートナー」と位置づけ、「農」に基づくメンバーシップを強化していくこと、同時にJA役職員は農協運動の推進者として行動改革に取り組むことが、これまで以上に求められている。

しかし、JAの現場では、教育文化活動の必要性は一定の理解がすすんだが、役職員の理解度やJA間の取り組みには課題が残っている。

そこで本委員会では、組合員のアクティブ・メンバーシップの確立に資する、協同組合学習や教育文化活動が果たすこれからの役割とその具体的な展開方策について、先進的な取り組みをしているJAに学びながら整理し、これまでにまとめた「JA教育文化活動の手引き」「支店を核とした組織基盤強化検討委員会」報告書をふまえながら、JAの教育文化活動を活性化するための研究・検討を実施する。

2.研究テーマ

1）組合員のアクティブ・メンバーシップに資する教育文化活動の重要性についての理論構築
2）正准組合員、組合員リーダーのメンバーシップ強化のための教育文化活動のあり方
3）支店協同活動の現状と課題、JA教育文化活動に果たす家の光事業の役割

3.検討委員会の構成

※役職名は平成29年3月1日現在

○コーディネーター

北川 太一（福井県立大学教授）

○アドバイザー

小林 元（広島大学大学院助教）

○委員

秋田県	JAあきた北	代表理事専務	佐藤 清孝
長野県	JA松本ハイランド	代表理事専務	髙山 拓郎
石川県	JA小松市	代表理事専務	山根 清弘
兵庫県	JA兵庫西	代表理事専務	福本 博之
広島県	JA三次	代表理事専務	冨野井 利弘
福岡県	JA福岡市	代表理事専務	清水 秀喜
家の光協会		代表理事専務	髙杉　昇
		常務理事	関口　聰
		常務理事	河地 尚之